

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成30(2018)年
3月号
通巻571号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成30年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



大阪府住吉区、万代池の群れ雀 大阪府大東市 坂田浩康さん撮影

再録 昭和42(1967)年10月23日発行『すさのお』第13号より

手をむすびあう宗教の場を ― 座談会 (中)

法主様を囲んで瑞光院にて

法主 矢追日聖 (満55歳)

出席者

西辻誠二
合田佳三郎

戸田忠好
柴地則之

司会

編集部(平谷照子)

明快な原始仏教

柴地 仏教と言った方がよろしいですか、西辻さんの場合は。

西辻 そりゃあ、あのー、仏教的なものは好きですわ(笑)、好きや。そうかといって宗教がきらいかというところ、宗教的なことは、どっちかというときらいなよりも好ましいわな。それでも宗教と言うと、若い人はすぐには古い考え方やと言うし、仏教信者やと言うと、あいつは大分、時代おくれな奴やと思われるわな。しかし、わしはそれはかまへんと思ってる。それは、そう思う方が勉強が足らんのかなと思ってる。説明がいるわな、宗教といったら。

それはな、仏教や言うたら、古くさい、陰気な感じがあるところがあるけれど、原始仏教というものを読んでみると、非常に明快な感じがするのや。現実的な感じがするのや。日常ありきたりのいろいろな問題に対するお釈迦さんの答が、実にこう明快な感じだな、これは国柄かな。まあ、いろんな受けとり方やと思うが。

そういう仏教が、印度から中国、朝鮮を通じて日本へ来るその間にいろんな夾雑物が入り、日本という湿気の多い国に来ると、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常

の響きあり」と如何にも陰気くそうになってくる。祇園精舎には鐘はなかつたそうやが(笑)、ほんとかうそか知らんけど。

それが原典と言われるものをこの頃読んでみると、実に明快なんやな。釈尊という人は見ようによつたら大変に現実的な人なんです。どんなところが現実的かと言うと、霊魂の問題、死後の問題、それからこの世界は限りあるものか限らないものかという世界の問題に対する弟子達の話について、あまり触れんと直ぐに話を現実の問題にもどしてこられるんや。

「毒矢のたとえ」というのがありますわな。今お前さんの胸に毒矢がささつたら、お前さんは毒矢を先に抜くか、それとも、その毒矢がどこから飛んできて、どんな毒がぬつてあるか、誰がその毒矢を放つたかとかいつて詮議するか、とたずねるんです。弟子はそりゃあ毒矢を先に抜かんといかんと言えと、その通りである、お前さん方も三毒という毒におおわれているのだから、それを先に抜きとらんといかんというようなことを再々言うておられるんです。そういう明快な答を出しているものが、他にもあるわけです。

それに原始仏教というのは、教団に入らないと仏教徒やないというのではなしに、三帰といつて仏・法・僧の三宝に帰依することによって、仏教徒やというわけです。それから、本来は仏教では葬式というものをきらつて、そういうものは寺の外でさしたというこらしんです。

柴地 ところで、あえて西辻さんの話に異論があるわけですけど、ヒンズー教のことはよく知らないのですが、インドの土俗的な霊魂の不滅とか、輪廻転生とか、そういうものを信じるものの中にあつて、釈尊の理知的な教えというものが、どれだけの生命力をもって民衆の生活に根づいたか

ということなんです。

現在、インドの仏教徒は二十万位という非常に少ない数なんです、そういうところから考えましても、僕はやっぱり宗教というものは、理知的な哲学的な匂いだけでなしに、潜在意識の世界にまで浸透するようなものでないと……これには、勿論、危険がふくまれています。でないに生命力の薄い、教祖の死後において、分裂をひき起こし易いものになってしまうのではないかと、いうように考えるんです。

ですから、宗教には理知を超えた世界のもの、人間の理知的なものが組み合わされたものが必要ではないかと思うのですが、その点、僕のがかがうところでは、大倭は顕在意識と潜在意識が巧みにミックスされていて、どちらにもかたよらないと思うのです。

しかし僕には、その潜在意識の世界はよくわからないのです。が、理知だけではない、何か奥深いものがあることは感じていますが。

霊人と同居

西辻 自分にもそれは魅力ですね。釈尊のその明快なところだけがすべてやないし、また、それだけで言いきれんものが沢山あります。だから、その何というか、神秘の世界というものをわしらもぞぎたい。しかし、不幸にして、その幽霊に逢いたいけれど、逢うたことがない(笑)と。

これは、持ち味があることやから、その人たちにそんなことは研究してもらつたらよいと思う。

柴地 ところで、その一致した動きというものはどんなものですか。

法主 どういうような一致を言うんですか。
柴地 霊界というその神秘的な世界との一致です

ね。僕が法主さんの行き方を見ていると、霊界中心やないんですね。言うておられることは、ものすごく理知的な面が多いんです。また神秘的なことを言うておられて、無条件にそれを信じて動いておられる面もあります。その辺がどういふところから決まってくるのか。

法主 それはやはり、自分も肉体を持って現界に居るのだから現界が中心ですよ。現界中心だけど、これはうちの祭典などの時に、法話でもよくするんやが……。

自分の感覚でとらえている問題ですが、肉体を持つて人間と、肉体を持つてらん人間とがあるわけです。我々は現象界に生まれているから、こうして肉体を持っているが、我々から見てかりにバタツと死んだ、心臓がとまったということになるとね、今まで肉体に入つておつて肉体を使つて生きてきた一つのエネルギー、宇宙の生命体というものですがね、それは、この肉体がなくなつても同じ働きを持つていますね。

ただ、自分の使つていた入れ物がなくなつただけであつて、人間の心、本心はなくなることなしに生きとるわけです。だから我々肉体の持つて人間と、死後、肉体を持つていない人間は、目に見えなくとも同居していることになるんです。これは、自分の感覚ではですよ。

だから肉体の持つて人間と話し合つて、自分がいろんなことをたずねても答えてくれない人がありますわな。そんな時、肉体を持たない人間に話しかけてみるんです。そうしたらそんな人の方が案外いい知恵を出してくれますね。

それを、その、みんなは神さんや仏さんやのと言つて、人間の世界から切り離れた別の世界のものだということに扱つてしまうからおかしくなつてくるんです。が、私の場合はね、それを神さん

や仏さんとは言わないで、霊人とか靈魂とか言います。

我々が生活しているのは自分一人でなしに、また姿のある人間だけやなしに、他にまだ肉体の持たない人間も一緒に同居している。それがお互いに仲良くしていくということです。

ところで、世間でよく言われる「ざわり」とか「邪霊」とか「先祖さん、うかばれてない」とかいうことは、みなこの肉体の持たない人間の迷いや苦しんでいる状態をさして、そういう風に言っているんです。それで、そういう悩みがある時は、我々が霊界人のその悩みを逆にこちらから助けてやる。その代わり我々が困っている時には、霊界人である肉体を持たない人が、肉体を持っている我々に協力をしてくれるし、仲間にもなってくれる。霊界人に対して私はそういう感覚で扱っています。

だから、私は生きている人にもこうして合掌して挨拶するのは、お互いに持っている心、本心に対して敬意をあらわすんです。勿論、肉体を持たない人間に対しても同じことです。相手がえらいから拜むのではなしに、尊いわけですな。自分にも尊いものがあり相手にもある。いわゆる仏教で言えば衆生(しゆじやう)仏性(ぶつじやう)ありですね。

そこで、我々現界にいるものが仲良くいこうと思えば、別に片方にある霊界人が苦しんだり仲悪くしておると、現界が仲良くいけないわけやな。仲間はずれにしたということで、裏から邪魔をされることになるわけですね。

だから、ダンチ(柴地)が言うような神秘的なものでも何でもないわけですよ。ただ、いつもこの姿のない人間が我々に協力してくれている話をするだけです。死んでしまったから、相手が別な世界にいるというのではなしに、いつも身近にい

る。そうであればこそ、ご飯を食べる時にも、生きていく人間が食べるなら、姿のない人間も一緒に頂こうやないか、また一緒に暮らそうやないかという、私のはそれなんですね。

ですから、見る人によってはおかしいかも知れませんが、私の心の世界は肉体を持っている人間の世界だけとちがいます。肉体を持たない人間の世もみな仲間です。私の場合は、自分から切り離れた別の世界にいる仏さん、神さんという気持はありません。

氏神さんに行っても、ああうちの仲間ここにいるわという気持で遊びに行くんで、めったに拝みに行きません。手を叩くのは挨拶やからね。お寺へ行っても、ああここにも仲間がいるわいというのでポンポン手を叩く。どういうか、とにかく身近な感じで行きます。今のヒンズー教徒なんか、どう考えているか知らんが、おそらくお釈迦さんの場合でもね、似たような気持があったと思う。

だから、どうしても現界を中心として物考えう霊界人のいることがわかる人はわかればよいし、また、仲間になればよいんです。

それで仏教なんかでは、今おっしゃったようにね、随宜(ずいぎん)説法(せっぽう)と云うて、相手に応じて、機根(きこん)に応じて、釈尊(しやくそん)が教えを説いたといった面がありますね。

しかし日本へ入ってきた大乘(だいじやう)仏教(ぶつぎやう)なんかは、お経(きやう)を読んでも、釈尊(しやくそん)でも説明(せつめい)できんというようなことが沢山(たくさん)書いてあります。たとえば、甚深(じんしん)微妙(びょうみょう)の法(ほふ)だからほんとのことは言(い)われな(な)いとか、唯(ただ)仏(ぶつ)と仏(ぶつ)だからお前(まへ)が仏(ぶつ)にならねばわ(わ)からな(な)いんだとか、そういうようなことが教典(きやうてん)の中(なか)に出てき(で)ますね。そうすると、今まで言(い)ってきたことは、或(ある)程度(ていど)、相手に応(お)じて教(き)化(か)してき(き)たというよう(よう)なこ

とですわな。

自然の知恵

西辻(にしつじ) そのところですか、そういうことを山岸(やまがし) (巳代蔵(みよぞう)) さんにも、もう少し聞(き)きたかったのやが、聞(き)かれんじまいになってしまった。そういう知恵(ちえ)を超(こ)えたもう一つ奥(おく)の世界(せかい)の靈妙(れいめう)不可思議(ふかしぎ)なものに對(たい)しては、お釈迦(しやくか)さんでも説明(せつめい)しようのないものを持(も)ってばつたかも知(し)れませ(せ)んな。

そりゃあ、明快(めいけい)な割(わり)り切(き)った行(い)き方もい(い)けれど、それ(それ)だけでは物(もの)足り(たり)んものがあるわけ(わけ)です。わ(わ)しもど(ど)つち(ち)か(か)とい(い)うと、神(かみ)秘(ひ)体(たい)験(げん)が好(よ)きや(や)か(か)ら(ら) (笑)。

法主(ほふしゅ) かりに靈動(れいどう)なんか起(こ)こつてくる時(とき)にも、こ(こ)れは自(じ)分の意(い)識(し)で自(じ)ら(ら)がう(う)し、ま(ま)あ、自(じ)然(ぜん)発(はつ)生(せい)ですわ(わ)な。そう(そう)な(な)らう(う)として精(せい)神(しん)統(とう)一(いつ)をす(す)るでもな(な)し、神(かみ)さん(さん)を拜(ひ)むでもな(な)し、滝(たき)にうた(うた)れ(れ)るでもな(な)いの(の)に、普(ふ)通(つう)に(に)して(して)いる(る)中(中)で、あ(あ)あ(あ)いう(う)もの(もの)が突(つ)然(ぜん)に起(こ)こつてくる(る)とい(い)うこと(こと)に對(たい)して(して)は、お(お)そ(そ)らく(く)い(い)くら(ら)頭(あたま)がよ(よ)くて(て)も、勉(めい)強(きやう)して(して)い(い)ても解(かい)明(めい)は出(で)来(き)ない(な)い(な)だ(だ)らう(う)と思(おも)う。自(じ)分(ぶん)の考(こう)え(え)で(で)は(は)どう(どう)にもな(な)らず(ず)、自(じ)分(ぶん)の力(ちから)で(で)どう(どう)し(し)よう(う)もな(な)い(な)とい(い)うもの(もの)に(に)ぶ(ぶ)つ(つ)か(か)つ(つ)て(て)しま(ま)う(う)ん(ん)です(す)から(ら)ね(ね)。

我(われ)が自(じ)身(み)で何(なに)故(こ)う(う)なる(る)のか(か)、こ(こ)れ(れ)を解(かい)明(めい)し(し)よう(う)と思(おも)う(う)ても、理(り)知(ち)では(は)どう(どう)す(す)る(る)こと(こと)もで(で)き(き)ない(な)い(な)の(の)な(な)のです(す)。理(り)知(ち)を超(こ)え(え)た(た)、もう(もう)一(いつ)つ(つ)奥(おく)の潜(ひそ)か(か)意(い)識(し)と(と)か(か)奥(おく)の知(ち)恵(え)です(す)ね(ね)。ま(ま)あ(あ)大(だい)自(じ)然(ぜん)の觀(くわん)智(ち)と(と)も(も)い(い)う(う)か(か)、そ(そ)う(う)い(い)う(う)もの(もの)が(が)さ(さ)せる(る)業(ごう)です(す)。

催眠(きへん)術(じゆつ)み(み)たい(たい)に(に)あ(あ)る(る)一(いつ)つ(つ)の約(やく)束(そく)があ(あ)つ(つ)て、目(め)を(を)つ(つ)ぶ(ぶ)らす(す)とか(か)どう(どう)と(と)か(か)い(い)う(う)の(の)で(で)なし(し)に、靈(れい)動(どう)の(の)よ(よ)う(う)に自(じ)然(ぜん)発(はつ)生(せい)に起(こ)こ(こ)る(る)もの(もの)を(を)見(み)て(て)い(い)ると、古(いにし)い(い)イ(イ)ン(ン)ド(ド)に(に)でも(でも)こ(こ)う(う)した(した)自(じ)然(ぜん)発(はつ)生(せい)的(てき)な(な)方(かた)法(ぽう)法(ぽう)によ(よ)つ(つ)て、バ(バ)ラ(ラ)モ(モ)ンの僧(そう)侶(りょ)や、ヒ(ヒ)ン(ン)ズ(ズ)ー(ー)教(きやう)の僧(そう)侶(りょ)た(た)ち(ち)の中(なか)に、

人間の理知で及ばぬ何かがあると感じとった人がかなりあったのではないかと思うんです。

おのれいしのせい

編集部 霊界というのは現界と重なっているものなんでしょうか。

法主 重なっているも、並んでいるもない切り離せん一つのもの、この現象界も霊界の中ということ、現界即霊界というわけです。

我々がどう霊界に通じているかということは、自分のこの身を見ても、肉体は現象界に属するものだが、肉体に入っている心というものは霊界に属していることになるわけです。ここからこつちが霊界とか現界とかいうような区別は全然ないのだから、脳みそを通して考えるからおかしいで、脳みそを通さぬ心の働きは純然たる霊界に住まいしていることになるわけです。

編集者 その一つのところに住んでいて、何故、誰にも霊界が見えないのでしょうか。どうして霊界が見える者と、見えない者があるのでしょうか。

法主 それはね、神さんに言う苦情やな(笑)。
神さんというのは宇宙創成の生命体を神さんと言うんやで。まあ仏教では久遠の本仏と言っていいけれど、そういうように個人差をつけてできてるように根本にふれられなかったのや。

編集部 先ほどのお話にもありましたが、お釈迦さまが靈魂の問題にふれられなかったというのも、言っても通じないものが大部分だし、たとえれば、私なんか言ってくれてもわからないです、それだけでなしにそれを悪用して、今でもありませけれど、怪しげなことを言ってる人に不安をもたらずというようなことがないように、戒められたのちがうんでしょうか。

法主 あの当時は、そんなのばかりだったのちがうかな。たとえば山へ入って木の実ばかり食ったり、行をしていわゆる神通力を得るとか、そういうような超人的な能力を自分に備えるというか開発するとか、それがためにそんな行をした人が多かったと思う。お釈迦さんもその一人やったのが、六年か何年か、檀特山に入って、いろんな仙人たちにつかえていたのが、どうしたことかフラフラになって山から出て来られた。

だから、お釈迦さん自身もそういうことはわかっておられる筈や。といって山へ入って「行力」が出たからといって何になるかということだね。だから、人間が成仏する上において、まず観念のあやまりから直していかなければならない。

西辻 そうそう、そういうことをしても安心の道ではない。本当に人間が幸せに安心した生活をするために、「われ、ひとと共に繁栄せん」(※山岸会のスローガン)というような倫理性を持った行き方をせんと、本当の安心は持てんという結論になったのやないかと思う。

法主 私もそう思いますね。

編集部 西辻さんがおっしゃったような「われ、ひとと共に繁栄せん」ということや、合田さんがみんなと仲良くしていけばよいじゃないかとおっしゃった、そういうことに関連しまして、今度大倭会館を建てるについて、そのための話し合いの場として建物をいかしていくことができたと思うのですが、それについて何か。(続く)

昭和四十二・九・二七 文責・編集部
※大倭会館は、次の年の昭和43年12月23日降誕祭の日に食堂棟(鉄筋コンクリート)が出来上がり使用開始。その後昭和46年9月4日東光大祭の日に平屋(当初のプランは2階建)のプレハブ建築で全体の建物が竣工した。

出席者の思い出

今回掲載の座談会に登場している西辻誠二さん、合田佳三郎さん、戸田忠好さんにはじめてお会いしたのは、たしか昭和42年頃のことだった。当時私は東京の日本協同体協会というところで『月刊キブツ』という月刊誌の編集などの仕事をしていた、大倭とはまだあまり縁がなかった。

山岸会関係の友人、奥村久雄さんが「草創期の山岸会に詳しい面白い人達がいるので、是非会ってみたら」と連れて行かれたのが、大阪府交野市にあった西辻さん宅で、そこに合田さんと戸田さんも同席していた。

西辻さんは昭和36年すでに世界していた山岸会の創始者、山岸巳代蔵氏とも親しい間柄だったようで、関西弁の軽妙な語り口で初期の山岸会の実態について面白おかしく話してくれた。三人に共通していたのは山岸会のかかわりだけでなく、「無水ナベ」とか「吉岡ナベ」とか呼ばれるアルミ製の調理ナベの訪問販売をしていることで、いかにこのナベが万能であるかも力説していた。

合田さんはこのナベの関西での販売の胴元をしているらしく、物静かだが胆が据わった親分的風格があった。西辻さんと戸田さんは中国鍼に興味を持ち鍼灸師の資格をとって治療師としても仕事をしていた。奥村さんは「西辻さんは口で鍼を打つが、戸田さんは繊細な感覚で鍼を打つ」と冗談まじりに評していた。

この三人が醸し出す雰囲気には独特のものがあって、司馬遼太郎の歴史小説『国盗り物語』にも出てきそうな、戦国時代を渡り歩く商人のような得体の知れぬ存在感があった。この方達が当時大倭と縁があるうとは、その時は全く知らなかったのである。(編集部 岸田哲)

中村俊哉さん追悼特集

平成30年1月12日帰幽(享年65歳)

父へ

長女 知都世

今、すぐにも会いたいです！

妻 千久佐

お父さん、貴方は今何処で何をしていますか？

姿を見なくなつてから、毎日寂しさと葛藤しています！ 子供や孫は口うるさく賑やかですが、貴方がいない物足りなさを感じます！

想えば、昨年十二月七日に入院して、正月は一時帰宅したいと言っていたのに、主治医にも少し落ち着いたら退院出来まずよ、と言われ我慢していたのに、一月十二日容体が急変して旅立って行きましたね！

毎日、私の心は悶々として精神的に追い詰められています、貴方の遺影はいつも笑顔なので、とても羨ましいです。でも一分一秒でも長生きして欲しかった。

いつの日か、貴方の所に行くまではそっと見守ってね！ 命を全うしたらお迎えをお願いします。

今は何が何だかわからないまま、私は色んな手続きに追われ忙がしいです。



時々、貴方を想いながら口ずさんでいます。

涙そうそう

古いアルバムめぐり ありがとうってつぶやいたいつもいつも胸の中 励ましてくれる人よ 晴れ渡る日も 雨の日も 浮かぶあの笑顔 想い出遠くあせても おもかげ探して よみがえる日は 涙そうそう

オトンへ

長男 俊聡

オトン65年の人生はどうやった？

「楽しい事もあったで！」って言われたけれど、心配ばかりかけたから悪かった。小さい時、よく怒られたけど夜、仕事から帰って来て疲れているのに、俺たちを生駒にある遊園地とかに連れて行ってくれたり、姉貴達の中で育った俺としては、2人でキャッチボールしたのが凄く思い出に今でも残ってる。

病氣してからも入院するまで、体調悪かったのが気つかんでおつて悪かった。普通に喧嘩してたしあの世にいったんは今でも信じられんよ。

でもな、暗くはならへんよ！俺なりに頑張るから心配せんとのおんびり見ててや(笑)。安心してな！俺も、人生、後悔なく走ってまっとうするからな！

俺が死んだら道に迷わんように迎えに来てや！ ほんだら、またな！

65年の人生はどうでしたか？

お母さんと結婚し、私達子供が4人が産まれてどうでしたか？ 2人に良く聞いたのが「知都世は寝つきが悪かったから、仕事終ってから良くドライブに行つたで！」。ちゃんと記憶に残ってます(笑)。私のかすかな記憶ですが「寝た！」とお父さんとお母さんが思つて、車から下ろしたらまた、泣き出すからまたドライブに行つたとか(笑)。妹と弟ができてからはマシになったようですが(笑)、いっぱい手をかけさせた様で、ごめんね。

大きくなってからも、たくさん迷惑かけたこともあつて、今後どうやって親孝行・恩返ししていかうと思つたのに……こんなに早くに居なくなるとは思つてなかったから、何もできないままで旅立たせてごめんね。

お父さんにするはずだった親孝行はお母さんに少しづつでも返していくね。

まだ、本当にお父さんがこの世からいなくなつた実感があまりなく、長い旅行にでも行つてるような気持ちです。

お母さんをはじめ子供も孫も手がかかる奴ばかりで(笑)、毎日、家の中がうるさいくらい賑やかで、やつと今静かに自分の時間を過ごせているんだらうね。

今も変わらず家の中はうるさいくらい賑やかになら皆やってくるから、もう何も心配しないで、そちらから佐登志(生後三日で亡くなった三女)と見て下さい。

産まれてから今まで本当にありがとうございま

した。65年間、本当にお疲れ様でした。

じいじ

孫 飛翔(19歳)

今までの人生は貴方にとってどんなものだったか？

僕にとっては厳しいおじいちゃんだったように感じました。でも、お母さんやばあばは「あんたに一番甘かったで」と言っていました。そう言われるとそんな気もしなくもないです。

「学業や学歴を気にせずに休まずに学校に行ってくれたらそれでいいよ」と言ってくれたのが僕にとって一番うれしい言葉でした。

これから大人になっていろんなことが起こると思います。じいじが短気な性格なのはわかっていますが、どうか気長に成長していく僕たち兄弟を見守っていてください。

じい、今までありがとう

孫 篤夢(18歳)

じいにとつての65年間の人生はどのようなものだったか？僕にとつてじいは、家族思いで優しく、ときには厳しい祖父で尊敬できる人でした。

小学生の時、放課後遅くまで勉強してる時、何も言わずに迎えに来てくれました。学校の授業の途中で熱を出して早退しなきゃいけなかったときは、仕事をやめ迎えに来てくれました。その時から迷惑かけてばかりでしたが嬉しかったです。

高校に入って射撃部に入るって報告したら、じいは、顔色変えずに「そうか、応援してるから頑張らなあかんで」と言ってくれました。この言葉がなかったら今の僕はありませんでした。

大会に出るときはいつも、「失敗してもいいから頑張ってください」とって声をかけて見送ってくれました。じいのこの言葉のおかげで大会でベスト8に入れたり、県内で1位になれたりできました。大会が終わって夜遅くに家に帰って来たら、必ず起きて待っていてくれました。そして、「お疲れ、どうやった？」って聞いてくれて、大会の成績が悪かったときは、「残念やったな、でも頑張ってるからそれでいいやん、次の大会で頑張れよ」と言ってくれて励ましてくれました。

高2の時、部活のキャプテンになって報告した時は、笑顔で「おめでとう！でも無理したらあかん」と心配もしながら言ってくれました。じいにはいろんなこと言われたり教わりましたが、全部僕にとつてかけがえのない思い出です。これからは、就職して社会人になりますが、じいに教わったことを思い出しながら頑張ろうと思います。

これからも心配かけると思いますが、笑顔で見守っていて下さい。

父

次女 亜寿佐

私が子供の頃の父は怖かったような気がします。ですが、夜のドライブに夏には生駒山上遊園地、野球や旅行に連れて行ってくれたりもしました。小学校高学年か中学生ぐらい

平成30年 大倭会行事のお知らせ

【会 禊】 毎月第2日曜日

文化行事

- 第337回 4月22日(日)※第4日曜/京の春清水寺再訪
坂上田村麻呂、アテルイ、モレを訪ねる
- 第338回 5月20日(日)/大阪府交野市私市
樹医 山本光二さんを訪ねる
(日本樹木保護協会代表樹医)
- 第339回 6月17日(日)/八尾市 由義寺跡
弓削の道鏡関係
- 第340回 10月28日(日)・29日(月)/ 未定
ご提案があればどうぞ

【文化講演会】 11月10日(土)or11日(日)/ 交渉中

大倭会へのお誘い 年会費1万円

郵便振替 : 01060-6-31705

からは怒られることもなくなり、母には何か言っていたかも知れませんが、自分の思うようにやることを何も言わずにさせてくれていたような気がします。そのおかげで専門学校まで行き、勉強することが出来、また短期留学することも出来ました。仕事には真面目で、入院する直前まで週6日、ほとんど休むことなく行っていました。リビングの座椅子が定位置で、そこに座ってスマホでゲームをしたり、昼寝をしていました。車の運転が好きでした。近鉄バファローズが好きでした。焼酎とタバコが好きでした。漬物を作るのが上手でした。鍋料理や煮物を作るのも上手でした。8歳の孫と子供同士のようケンカをよくしていました。そんな父でした。

寸 莎

第129回

岩瀬 瞳さん



出逢いに導かれて

今年の一月十三日、筆者の友人である瞳さんは、兄・豪さん(享年四十二歳)の一周忌を迎えた。一年前の葬儀には豪さんを慕う多くの人々で溢れ、生前の人徳が偲ばれた。瞳さん曰く「兄は休日にはボードゲームをスーツケース一杯に詰め、日本中出掛けた。無償で人に振る舞い、地道に関係を作っていた」。豪さんは趣味のボードゲームの世界で有名な人もあったが、こんなにも沢山の友人に恵まれているとは、葬儀の日まで家族も知らずにいたようだ。

「信じられない純粹さ」と兄の氣質を評す。だがその純粹を支え信じる瞳さんの純粹も、実に得難い。彼女の人となりに第二の天性を加えたのは、この兄にありと感ずる。

昭和五十二年十二月十六日、岩瀬瞳(旧姓高野)さんは、高野利男、

美恵子さんの長女として東京に生まれる。利男さんの父は下駄屋でルーツは新潟。美恵子さんの父のルーツは岐阜、戦後裸一貫から創り上げた中小企業の社長で、美恵子さんの結婚の条件は「利男さんが会社を手伝うこと」だった。利男さんは義理の父に「から会社の技量を仕込まれ、深く信頼された」。

そんな恵まれた家庭環境で兄妹仲良く育っていたが、会社もあつた羽田の小学校で、瞳さん一年生、豪さん四年生の時に事件が起こる。砂場で兄が背中に砂を入れられ、翌日そのいじめ連中と決闘に。兄妹で前日に持えた輪ゴムと割箸の銃や紙のおもちゃで挑むと、相手は子供ながらに空気銃や木刀・鞭と本物の武器で構えていた。石を投げられ、空気銃の弾が兄の目に命中。兄が叫び倒れた後は呆然自失、瞳さんの記憶は今もまばらだ。学校は事件を校外で起

きたことと黙視、いじめた側に謝罪はなかった。「頭が良すぎた兄は特別扱いされていたし、工業地帯は貧しい家も多く、色んな背景を持つ子達がいいたのだろう。けれどなんで兄がいじめられなければならないのか、かわからなかった」

四年生の時、茨城県取手市に移住。利根川沿いの落ち着いた環境になったものの、中・高校でも兄のいじめ問題は続いた。優しく人を信じる力の強い氣質の高野家の人達であれば、尚更傷も深かったに違いない。「八十年代、子供のいじめによる自殺のニュースが兎に角嫌で悲しくて、死ぬという選択肢をとらせたくなかった」。身近にいじめの種があれば摘み取り、弱き者の絶対的味方に立つ彼女の核と視座が形成される。

高校は東葛飾高校に入学。校風は自由、自主性を活かす学校だった。カウンセラーになると決意、一九九七年横浜市立大学国際文化学部人間科学科に入学。しかし期待していた心理の授業には「心底がっかりした」と笑う。一つの方法論や技術を万能とするのは神経質であやうい幻想だ。到底受け入れられなかった。もつと人間や自然の可能性、世界のリアリティに眼を開きたい。社会福祉論の加藤彰彦(野本三吉)先生の授業が「燦然と輝いていた。私の学びた

いこと、知りたいことがあるのはこつちだと感じた」。いじめを個の心理ではなく、周りの関係や社会の問題として掘む視座を据え、社会学の中西新太郎先生の下、戸塚廉や谷川雁のことも・ものがたり論を学ぶ。

同時期、妹の愛さんがつかこうへい劇団で活躍。演劇を通した人間理解の面白みに目覚め、文学の三谷邦明先生を始め学問分野を横断。特に宗教学の葛西實先生のガンディー論、近代化と根源への問いの追究にうたれる。兄のことを葛西先生に打ち明けると「お兄さんあつてのあなただったのですね」と深く受容された。「賑栄い塾」にも参加したり、大倭も何度か訪ねた。

様々な出逢いをとおして、「違いを喜びとし、仲良く生きることを探求してきたなと感ずる」。

二〇〇九年に岩瀬哲さん(理化学研究所・植物研究)と結婚。現在、樟(七才)、櫻(四才)、松(一才)君の常緑樹三兄弟の子育て真っ只中。夫婦共に自然から学び、教えられることを大事にしたいと考える。魚釣りや虫捕りに夢中な子供達の生活の場は、片づけても片づけても散らかるが「元氣な証拠」と明るい。最愛の兄を送り、今彼女は「次の世界(霊界)があるのだ」と強く思う。(聞き手||永坂まゆり)

あじさい日誌

2月11日 祝会。久しぶりに京都市伏見区の三宅淳之・博子夫妻と息子の惇君が来られ、しばらく参加されました。

2月15日 大倭神宮月次祭。

2月17日 午後、交流の家でF1WC定例委員会。空席だった委員長が決定。2009年に韓国キャンプに参加して以来9年目になるといふ西面千佳さんが立ち上がりました。

2月23日 午後1時20分から大倭神宮で申孝祭、2時から大本宮拝殿で月次祭が行われました。

この日は平成5年2月23日の

法話をお聞きしました。平成29年2月号『とおやまと』で「日本の歴史が本当の継承をしてこなかったこと」として掲載分。

3月2日 午前11時から大倭会館で故中村俊哉さんの五十日祭が行われました。

3月5日 教務本庁は来訪者が続き、午前中、高杉葵(神奈川県横浜浜市)・上條富子(岐阜県美濃市)さんが杉本順一さんと懇談。大倭墓地の夫・高杉一空さんのお詣りに来られたとのこと、前夜から大倭会館泊。

午後、ハンセン病を研究テーマにされる東日本国際大学の坂田勝彦准教授が、交流の家や紫陽花邑を訪ねて来られました。

3月6日 大倭神宮月次祭。平

第337回大倭会文化行事
京の春、清水寺再訪

日時 平成30年4月22日(日) 雨天決行
※注意、第4日曜日です。

集合 京阪清水五条駅東側改札口 午前10時
※注意 特急は停車しません!

交通 近鉄学園前駅9時00分発奈良行(快速急行)→大和西大寺駅9時7分発京都行(急行)に乗換え→9時38分丹波橋駅着、改札を出て京阪線へ徒歩2分→丹波橋駅9時43分発出町柳行(急行)で清水五条駅に9時52分着

行程等 10数年振りに清水寺に坂上田村麻呂、アテリイ、モシ、又彼らに縁のある方々を訪ねます。「和の光」の心を持参の上、奮ってご参加下さい。昼食はお店で。

連絡先 林 修三 080-2527-0840

田弘之・緑夫妻(新潟県佐渡市)、また藤本宏秋さん(京都府宮津市、前夜から会館泊)や、藤本さんに誘われて奈良市高畑の相中千鶴・甫喜本司さんが参拝されました。

夜、大倭会館で邑倭の会。

大倭安宿苑では(菅原園)

2月7日 通所フロアで豆まきをしました。

2月19日 外注食で5名がお寿司や中華料理等で昼食。

(須加宮祭)

2月27日 先生をお招きし音楽療法。昔の懐かしい歌や季節の歌と一緒に歌いました。

(長曾根寮)

2月19・20日(デイ) 離人形作り。一個ずつ自宅に持ち帰って頂きました。

2月24日(特養) 喫茶倶楽部あじさい。歌は「かあさんの歌」「四季の歌」「仰げば尊し」。

(茂毛路園)

2月26日 定例懇談会に17名が参加、施設長とお話しをされました。皆さんより貴重なお話を頂きました。

(八重垣園)

2月13日 職員の方が皆さんに教わりながら、雑壇を組み飾りつけを行いました。

こたまとたま

新潟県佐渡市 大滝哲也

『とおやまと』2月号届きました。

した。中村俊哉さん、驚きました。またそんなお歳ではないのに……。

見田さんは大倭でも佐渡でもお会いしているので、親しみを込めて読ませて頂きました。

野本さん、実は私と大倭のご縁をつないでくださったお方です。私が今で言う引きこもり状態のときに、石川愛人さんという方に悩みを相談したところ、その奥さんが野本さんとご縁があり、大倭を紹介して頂きました。『とおやまと(1978年頃の何月号か)』を一部同封したお手紙が石川さんから届いたのです。それを読み、家を出て大倭へ行く決意をし、私の人生の大きな転換を迎えました。

編集後記

「寸紗」の取材者の顔ぶれを増やしたら、取材対象の皆さんの幅が広がるのではないかと、これまでのスタイルに加えて、今年から随時やってみようということになりました。トップバスターは永坂まゆりさん(神奈川県大和市)にお願いしました。

永坂まゆりさん、妹のあづみさん、高野瞳さんはいつも一緒に何が面白いのかというぐらいよく大倭に来ていました。永坂姉妹とはますます馴染みを深めました。瞳さんは岩瀬さんになつてしばらく顔を見なくなり

ました。今回、寸紗に登場して

あんない

*月次祭(大倭神宮)

4月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*須佐緒祭(大本宮)

4月8日(日) 午前11時より大倭大本宮拝殿において祭典を行い正午より各自持参の弁当などで園遊会を行います。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐(結び)の緒に感謝をするお祭りです。

*大倭会主催第591回祝会

4月8日(日) 須佐緒祭の流れのまま、話も自由に歌舞音曲も歓迎という形で行います。

*箭負祭(大倭神宮)

4月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮ります登美の神奈備(大倭神宮)の霊威を法主日聖大恩師の遠祖(箭負氏)が代々祭祀し、神仕えてきたことを記念するお祭りです。

*月次祭(大本宮)

4月23日(月) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

頂いて、少しも変わらぬ「結ぶ心」を感じています。まゆりさん、瞳さん、ありがとう!

今後、どう展開していくか楽しみにです。(春)